

@onaishigeo



魔法少女の憂

鬱

*mahoude anatawo uba
eru nara*

@onaishigeo

第一魔方陣

少女はぶつぶつ呟ている。

地面を睨むその表情はとても真剣だ。

「ぐるぐるぐるぐる・・・うわあっダメ！」

大声をあげた少女は、突然、地面にへたり込んだ。

僕は慌てて少女に駆け寄る。

「どうしたの！ 妖怪出た？ サタン降臨？」

ところが少女は、膝をぱんぱんと払ってあっさりと立ち上がる。

「えへへー。それがー、魔方陣描いてたら、ちょっと酔っちゃってー」

照れて笑う少女は可愛かった。

しかしこのまま好き勝手させると、とんでもない災いが降りかかるような予感がした。

だから僕は、心を鬼にして少女に告げる。

「・・・魔女になるの、無理なんじゃない？」

少女は持っていた杖で思い切り僕の頭を叩いた。

魔法は下手だが手は早い。

(その腕力があれば魔法なんかいらんんじゃないか？)

言ってやりたかったけど言わなかった。

次の一発は、たぶん本気で叩くから。

第二魔方陣

少女は見るからに不機嫌そうだった。

マンガのように頬を膨らませているから、それが分かった。

どうすればそんなまん丸に頬が膨らむのか聞いたかったが、もちろんそんなことは口にしないい。

「何これ？ 木で出来た箒買って来てって頼んだでしょ。何なのこれ。どこが木なの！」

少女の最近のお気に入り「まず形から入る」。

しっかりした器が用意されていれば、技術や技能の習得も簡単という理屈らしい。

典型的な怠け者の屁理屈。

もちろん指摘はしないけど、いずれにしろ、とぼっちりを受けるのは僕の方。

「今どき木の箒なんて、普通のスーパーには置いてないんだよ」

「この私に！ 由緒正しき魔法の私に！ こんなプラスチックの箒に跨れって言うの？」

由緒正しきとは初耳だった。

もちろんこれも指摘しない。

「でも、時代は変わったんだし」

「変わらないのが魔法なの！」

変なところで頑固である。そして怖いくらいに耳が良い。そう、悪魔のように...

「・・・下着は新しいのが好きなくせに」

「なんですって！」

「あ痛！ 何度も僕の目の前で転んだだろ。見たくなくても見えちゃ痛！」

「変態変態へんたーい！！！」

「痛い痛い！ やめて、箒で殴るの反則！」

第三魔方陣

「どろん！どろどろろん！」

「なにになに！ 今度はなに？」

少女はよく注意しないと、突然変なことを試したがるので危ない。

いつぞやは、眠くなるという魔法をかけられ、時間差で術が効いて、入浴中におぼれ死にそうになった。

特に予告なく唱える呪文は危険度が高く、言えば反対されるのが分かっているようで、殊更こそ魔法の研究にいそしむようになっていた。

「ふふん、消える魔法。ね、ね！わたし消えた？」

しかし残念ながら僕の目の前には、自信たっぷりに仁王立ちする少女がはっきりと見えた。

僕は心から安堵した。

ただでさえ暴力的な少女が姿を消すことが出来たら...それは恐ろしい事態だ。

「あ、ホントだ見えない、あれーどこ行ったのかな？あれー」

「・・・」

少女の瞳が曇ってきた。

僕は嘘をつくのがかなり苦手だったことを思い出した。

「もしかして怒ってる？」

「そうだけど...あれー？ ふーん、見えるんだ」

少女の瞳が猛獣のように輝く。

「やべっ、どろろんどろろん！」

「え、え、えええー！ ずるい、なんであんたが消えるわけー」

僕も驚いた。

自分の手も足も見えない。

驚いたことに適当な呪文を唱えてみたら僕の方が消えてしまったのだ。

つまり、少女は単に呪文を間違えていただけで、魔方陣の生成には成功していたということか。

何という詰めの甘さ。

しかし僕は少しだけ少女を見直した。

だか...僕は魔法使いじゃないからこの呪文を解くことができない。

少女にできるのか？

たぶんできない。

僕たちは途方に暮れた。

第四魔方陣

僕は見えなくなっただけで食べたり喋れたり是可以する。

ただこんな状況でうかつに出歩けない。

何しろここは魔法使いの街。

透明なまま歩いていたら、他の魔法使いに気配を察知され、あらぬ嫌疑を掛けられ成敗されてしまうかもしれない。

仕方がないので術が解けるまで、少女の家にしばらく居候させてもらうことにした。

「...お風呂、覗く気でしょ？」

(そんなことしないよー)

「着替えとか、ニヤニヤしながら眺めるんでしょー」

(しないってば)

「...見えないのって、つままないね」

驚いたことに、少女がポロッと涙ぐんだ。

これはもしかして！

見えないながらも自分の顔が真っ赤になるのが分かる。

人が見れば空中から蒸気が立ち上っているのではないか？

(大丈夫だよ。見えなくてもずっと側にいるからさ)

「それじゃつままないの。見えなくちゃ殴れないんだもの」

(.....)

そういうことか。

それなら呪文が解ける前に、一度くらいは着替えを覗いてやろう。

それくらいしてやらないと割が合わないからね。

もちろん口に出しては言わなかった。

少女が殴れないんじゃ、言ってもつまらないからさ。

おまけの呪文(140字小説抄)

呪文 1

「えいやーっとおー！」

「ななな！何それ？」

「ふふふ、貴方に魔法をかけてあげたの」

「あ、それってもしかして好きになるってやつ」

「ううん、一生涯、私に貢ぎ続けて、でも一切見返りは要求しないって魔法」

「もしかしてそれってプロポーズ？」

「いやそのあの」

「・・・そのプロポーズって少し屈折してると思うよ」

「だから...こんな屈折している私でよかったら！」

呪文 2

「エロイムエッサイムエロイムエッサイム」

彼女がいきなり呪文を唱えた。

「え、え。いったい何？」

「ふふん。私を忘れたら罰を受ける呪文」

「いや絶対忘れないから！」

「・・・普通、誰だっていつかは忘れるものよ」

「いや俺に限って絶対に忘れない、本当だ！」

「・・・エロイムエッサイム」

「なにになになに！今度はなんだよ！」

「もちろん、嘘つきを懲らしめる呪文」

「オレはどう転んでも君から逃れられないってか」

彼女はにこっと笑った。

「ようやく分かった？」

呪文 3

彼女は僕を呼び出し突然の別れを告げた。

「意味がよく分からないんだけど、つまり僕が君を好きになってコクって付き合いが始まったのは魔法だったってこと？」

「そう、どうしても貴方の恋人になりたいくて、私がこっそりかけた魔法。ごめんね、騙してて」

「で、今からその魔法を解いてくれるって？」

「うん、だから貴方はもう私を好きじゃなくなったの。わかる？ 私に付きまとわなくていいんだからね！」

「...それってもしかして他に好きな男が出来ただけなんじゃない？」

「おほほほほほ！ そんなことないから。魔法魔法。ごめんねホントに」

「なんか納得いかないんだけど！」

呪文4

「え！ 本当は僕のことなんか好きじゃなかったけど、呪いのせいで仕方なく僕と付き合っていたと？」

「そう、意地悪な魔女に呪いをかけられちゃったの。でももう平気。素敵な王子様が呪いを解いてくれたから」

「・・・僕はどうなるの？」

「だから呪いだっただってば！」

「でも僕は呪いかけられてたわけじゃないし」

「でもわたしは解けちゃったの！」

「なんか、すごい誤魔化されてる感じなんだけど！」

※収録にあたり加筆したため140字を超えています。

魔法少女の憂鬱

<http://p.booklog.jp/book/38602>

著者 : onaishigeo

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/onai/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/38602>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/38602>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.